

私たちは若い研究者として、創造活動への意欲にもえています。だから大胆なころみをおこないます。しかしまた、それだけに、創造的な研究にとりくむなかで、内容、方法の両面について、これでいいだろうか、ひとりよがりではないだろうかという不安もあります。そこで今回の研究も、この不安にうちかかって、批判にたえて一歩一歩進歩してゆきたいと願い、思いきって、保育学会で発表してみました。ですから、こんどの受賞で、私たちが一番うれしかったのは、私たちの研究が、公の研究機関において、一個の研究として、その社会性が認められたということです。

しかし、これによって、批判されるべき面がおおいかくされたりすることのないよう、研究内容と方法に対するきびしい批判をうけてさらに成長できるように、何よりも皆さんのご意見、ご批判をいただきたいと思えます。そして、保育学会が、なおいっそう、一つ一つの研究に対する深い相互理解と相互批判の場となるよう、ともに努

力していきたいと思えます。

もう一つ、私たちが感じていることは、こんどの受賞が、若い人たちがみんなの創意で苦しみながら共同で研究をすすめてきたことへの、激励賞だということです。

倉橋賞を受賞して

金 田 利 子
児童心理ゼミの仲間

私たちにとって大きな喜びです。

そして、このことは、私たちだけではなく研究にとりくむ若い人たちに、勇気と自信を与えていると思えます。

最後にこの研究をおして、私たちが今真剣にぶつかっている課題について提起したいと思えます。自分たちの研究にいかん責任をもっていくかという問題です。

私たちの研究は、理想的な条件のとのつた乳児集団保育（Ⅱ教育）の重要性について、理論的にあきらかにしてきました。しかし、実際には、乳児には、いわゆる保育に欠けた子どもたちのためだけに、不十分な保育制度があるだけで、公教育として、すべての子どもに保障されてはならず、三歳児ですら幼稚園や保育所に入りにくくても入れない現状です。このような現実を目を向けたとき、私たちは子どものための研究者として強い社会的責任を感じます。研究が真に子どもへのしあわせのために役立つにはどうしたらよいか、ともに考えあつていきたいと思えます。